

# 阿治志貴高日子根神の神婚説話

原 田 敦 子

## はじめに

古事記上巻は天若日子の葬式にやって来た阿治志貴高日子根神が、容貌がよく似ていたため死んだ天若日子と間違えられて怒り、喪屋を切りふせ蹴とばして飛び去った話を伝え、その後妹の高比売命が兄神の御名を顕わすためにうたった歌として、「天なるや弟棚機の……」の歌謡を続けている。しかしこの歌謡は前後の話とは何ら関係なく、現在の古事記（日本書紀にもほぼ同様の記述がなされている）の記述の中におかれている限り、神の御名を顕わすという行為の意味が判然としないのである。しかもこの歌謡は、最初から阿治志貴高日子根神の御名を顕わすために歌い出されており、明らかに独立歌謡とは認め難い。従って「天なるや……」の歌謡は他の何らかの説話において、ある特定の状況を背景としてうたわれたものであり、それが古事記のこの場所に置かれたのは、歌謡に

うたわれた阿治志貴高日子根神が天若日子の説話にも登場するといふ縁によるものと考えられる。さすれば「天なるや……」の歌謡の真の意味を理解するためには、この歌謡が元来含まれていた説話の原形を復元して、もとの説話の中に置いて見る必要がある。

この歌謡にうたわれた「み谷二渡らす」の表象が蛇体を形容するものであることは、後に述べるように既に折口信夫、松村武雄両氏によって説かれている<sup>①</sup>。従ってこの歌謡は神の名を顕わすという発想と、その神が蛇神であるという二つの要素よりなっているということができる。小論では、この二つの要素の示す意味と両者のかかわり方を鍵として、「天なるや……」の歌謡の背景を考えてみたい。

## 一、名を顕わす説話

— 丹塗矢型と三輪山型の神婚説話 —

この歌謡の意図するところは神名を顕わすことであるが、これと同じ性格を有する説話は他にも見ることができ、武田祐吉氏も既

に指摘されているように、山城国風土記逸文は

玉依比売、於三石川瀬見小川、々遊為時、丹塗矢自三川上流下。  
乃取挿置床边、遂孕生男子。至成人時、外祖父建角身命、  
造八尋屋、豎八戸扉、釀八腹酒而、神集々而、七日七夜樂  
遊。然与レ子語曰、汝父將レ思人、令レ飲此酒、即奉酒杯、向レ天  
為レ祭、分三穿屋臺、而升於天。乃因ニ外祖父之名、号ニ可茂別雷  
命。所レ謂丹塗矢者、乙訓郡社坐、火雷命在。

と賀茂神社の縁起を記し、また年中行事秘抄四月賀茂祭条及び本朝  
月令にも同じ話を載せている。右の説話では細部に異同はあるもの  
の、神が丹塗矢と化して女のもとに近づくこと、生れた子の父神を  
知るために鬻酒を醸して、その子をして盃を父神に捧げさせること  
が骨子となっている。

またこれとよく似た話は他にもある。

所ニ以号ニ荒田ニ者、此处在神、名道主日女命、无父而生レ兒。為ニ  
之釀ニ酒、作ニ田七町、七日七夜之間、稻成熟竟。乃釀酒集諸  
神、遣其子捧酒、而令レ養之。於是、其子、向ニ天目一命一而奉  
之、乃知ニ其父。後荒其田、故号ニ荒田村。

(播磨国風土記託賀郡)

ここでは地名起源説話に変形させられてはいるものの、説話の原形  
は、賀茂神社縁起譚から丹塗矢云々の件りと子の昇天の件りを除去

阿治志貴高日子根神の神婚説話

したものにはほぼ等しい。

古事記中巻は神武天皇の皇后となった伊須気余理比売の出自に関  
して、次のような話を伝える。

三嶋湍咋之女、名勢夜陀多良比売、其容姿麗美。故、美和之大物  
主神見感而、其美人為ニ大便之時、化ニ丹塗矢、自其為ニ大便之  
溝上流下、突ニ其美人之富登。爾其美人驚而、立走伊須須岐伎。乃  
將ニ来其矢、置レ於ニ床边、忽成ニ麗丈夫、即娶ニ其美人一生子、名謂ニ

富登多多良伊須須岐比売命、亦名謂ニ比売多多良伊須気余理比売。  
この説話は神が丹塗矢と化して女のもとに通ったことからして、先  
の賀茂神社縁起譚と同じく丹塗矢型説話として一くくりにすること  
ができる。しかし一方、日本書紀には同じ比売の出自に関する記述  
が他に二カ所あり、いずれも右と伝を異にしている。

事代主神、共三嶋溝櫛耳神之女玉櫛媛一所生兒、号曰ニ媛踏躰五  
十鈴媛命。(神武天皇即位前紀庚申年八月)

又曰、事代主神、化ニ為八尋熊罴、通ニ三嶋溝煮姫、或云、玉櫛  
姫。而生ニ兒姫踏躰五十鈴姫命。(神代上一書)

ここでは三嶋溝咋の媛に通った神は事代主神であり、しかも神は  
「八尋熊罴」と化していることからして、この話は丹塗矢型説話と  
は別のものであり、むしろ次に述べる三輪山型説話に近い。「八尋  
熊罴」とは所謂「長物」であって、その性格は蛇と同じと考えられ

る。

右にあげた一連の説話は、共通して男神がその素姓を隠して女のもとを訪れ、子をなすという話の筋をもつ。いわゆる神婚説話である。この世の男ならぬ神を夫としたために、子の父の正体はどうしても知ることができない。子の父は一体誰か、この切実な疑惑をほらすために行なわれたのが、誓酒を醸し祭をすることであった。代表的な神婚説話である三輪山型説話においても、これとよく似た形で話が展開する。

此謂<sub>二</sub>意富多多泥古一人、所<sub>二</sub>以知<sub>二</sub>神子<sub>一</sub>者、上所<sub>二</sub>云活玉依毘亮、其容姿端正。於<sub>レ</sub>是有<sub>二</sub>壯夫<sub>一</sub>、其形姿威儀、於<sub>レ</sub>時無<sub>レ</sub>比、夜半之時、備忽到来。故、相感、共婚共住之間、未<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>幾時<sub>一</sub>、其美人妊身。爾父母恠<sub>二</sub>其妊身之事<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>其女<sub>一</sub>曰、汝者自妊。无<sub>レ</sub>夫何由妊身乎。答曰、有<sub>二</sub>麗美壯夫<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其姓名<sub>一</sub>、每<sub>レ</sub>夕到来、共住之間、自然懷妊。是以其父母、欲<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>、誨<sub>二</sub>其女<sub>一</sub>曰、以<sub>二</sub>赤土<sub>一</sub>散<sub>二</sub>床前<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>間蘇紡麻<sub>一</sub>貫<sub>レ</sub>針、刺<sub>二</sub>其衣襦<sub>一</sub>。故、如<sub>レ</sub>教而且時見者、所<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>針麻者<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>戸之鉤穴<sub>一</sub>控通而出、唯遺麻者三勾耳。爾即知<sub>二</sub>自<sub>二</sub>鉤穴<sub>一</sub>出之状<sub>一</sub>而、從<sub>レ</sub>糸尋行者、至<sub>二</sub>美和山<sub>一</sub>而留<sub>二</sub>神社<sub>一</sub>。故、知<sub>二</sub>其神子<sub>一</sub>。故、因<sub>二</sub>其麻之三勾遺<sub>一</sub>而、名<sub>二</sub>其地<sub>一</sub>謂<sub>二</sub>美和也<sub>一</sub>。此意富多多泥古命者、神君、鴨君之祖。

(古事記中卷)

初大國主神娶<sub>二</sub>三島溝杭耳之女王玉櫛姫<sub>一</sub>。夜未<sub>レ</sub>曙去。来曾不<sub>二</sub>昼到<sub>一</sub>。

於<sub>レ</sub>是玉櫛姫續<sub>レ</sub>宇係<sub>レ</sub>衣。至<sub>レ</sub>明隨<sub>レ</sub>宇尋覓。經<sub>二</sub>於茅渟泉陶邑<sub>一</sub>。直指<sub>二</sub>大和國真穗御諸山<sub>一</sub>。還視<sub>二</sub>宇遺<sub>一</sub>。唯有<sub>二</sub>三<sub>一</sub>。因<sub>レ</sub>之号<sub>二</sub>姓大三<sub>一</sub>。繁<sub>一</sub>。

(新撰姓氏錄大和國神別地祇大神朝臣)

是後、倭迹々日百襲姫命、為<sub>二</sub>大物主神之妻<sub>一</sub>。然其神常昼不<sub>レ</sub>見、而夜来矣。倭迹々姫命語<sub>レ</sub>夫曰、君常昼不<sub>レ</sub>見者、分明不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>視<sub>二</sub>其尊顔<sub>一</sub>。願暫留之。明旦仰欲<sub>レ</sub>覲<sub>二</sub>美麗之威儀<sub>一</sub>。大神対曰、言理灼然。吾明旦入<sub>二</sub>汝櫛笥<sub>一</sub>而居。願無<sub>レ</sub>驚<sub>二</sub>吾形<sub>一</sub>。爰倭迹々姫命、心冀密異<sub>レ</sub>之。待<sub>レ</sub>明以見<sub>二</sub>櫛笥<sub>一</sub>、遂有<sub>二</sub>美麗小蛇<sub>一</sub>、其長大如<sub>二</sub>衣紐<sub>一</sub>。則驚<sub>二</sub>之叫啼<sub>一</sub>。時大神有恥、忽化<sub>二</sub>一人形<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>其妻<sub>一</sub>曰、汝不<sub>レ</sub>忍令<sub>レ</sub>羞<sub>二</sub>吾<sub>一</sub>。々還令<sub>レ</sub>羞<sub>レ</sub>汝。仍踐<sub>二</sub>大虚<sub>一</sub>、登<sub>二</sub>于御諸山<sub>一</sub>。

(崇神紀十年九月)

これら三輪山型説話においては、丹塗矢型説話における誓酒にかわって葦環の糸が登場し、その糸をたどって男の素姓を知ることが話の重要な要素となっている。夫の素姓を知りたいという女の心を、より直接的に表現したものと見えようか。

このように丹塗矢型と三輪山型の説話は双方とも神婚説話であり、しかも人間の女が正体の知れない男(実は神)の求婚を受け入れるという妻問婚の形式をとっているために生ずる女の疑惑、不安、そして当然の願望をテーマとしている点で共通する。「天なるや……」の歌謡は、明らかに阿治志貴高日子根神の御名を顕わそう

としてうたわれたものであった。神の名を顕わすという発想と、子の父そして夫の素姓を顕わすという発想は、同一線上でつながる。

「天なるや……」の歌謡によって神名を顕わすことの必要性は、右に挙げた一連の神婚説話と同じような背景をもった物語の中で生じたのであるうと考えられる。

## 二、説話伝承氏族としての鴨氏と三輪氏

古事記の「天なるや……」に登場する神は、前文に「阿治志貴高日子根神」と表記され、歌謡では「阿治志貴多迦比古泥能加微」と表記されているが、古事記の他の箇所や日本書紀、出雲国風土記には「阿遲鉏高日子根神」「阿遲須積高日子命」「阿遲須岐高日子命」などと表記される神は登場しても、アジシキなる音をその名に持つ神は登場しない。神代紀下の天稚彦の神話では、この神の名を「味相高彦根神」と表記して「味相、此をば阿賦須岐と云ふ」と分注し、歌謡では「阿泥素企多迦避願禰」としている。シとスではイ列音とウ列音の違いがあるし、シキのキ（貴）は乙類の仮名であるのに対して、スキのキ（岐・企・枳・伎）は甲類の仮名である。シキ（乙）とスキ（甲）は一応別語とみなければならぬ。従って、古事記というアヂシキ・タカヒコネ神と他書というアヂスキ・タカヒコネ神が果たして同一の神であるか否かが問題となる。しかし書紀の「天な

るや……」の歌謡を記した部分にはこの神の名がアヂスキ（甲）と表記されていること、また古事記上巻に

故、此大国主神、娶坐胸形奥津宮一神、多紀理毘売命、生子、

阿遲鉏高日子根神、次妹高比売命、亦名、下光比売命。

とあって、妹の名をこの歌謡の前文と同じく高比売命または下光比売命としてることなどによって、アヂシキ・タカヒコネ神はアヂスキ・タカヒコネ神と同一の神であるとしなければならないであろう。

シキ（乙）とスキ（甲）は音韻の交替による変化と考えるべきである。右の古事記の文は統いて

此之阿遲鉏高日子根神者、今謂之迦毛大御神者也。大国主神、亦

娶神屋楯比売命、生子、事代主神。

と述べる。「迦毛大御神」とは、出雲国造神賀詞に

乃大穴持命乃申給久、皇御孫命乃静坐牟大倭国申天、己命和魂乎、

八咫鏡爾取託天、倭大物主櫛瓊玉命登名乎称天、大御和乃神奈備爾

坐、己命乃御子阿遲須伎高孫根乃命乃御魂乎、葛木乃鴨能神奈

備爾坐、事代主命能御魂乎、宇奈提爾坐、

出雲国風土記意宇郡賀茂神戸の条に

所造天下大神命之御子、阿遲須積高日子命、坐葛城賀茂社一

とあるものと等しい。神名式上の大和国葛上郡十七座の中には、

「高鴨阿治須岐託彦根命神社四座」並びに「鴨都波八重事代主命神

社二座」がある。阿治志貴高日子根神は事代主神と共に大國主神の子であり、大和葛城を本拠として勢力をはった鴨氏の尊崇する神であつたのである。

ところで、丹塗矢型説話のうち賀茂神社縁起譚は賀茂の上下の社を祀る山城の鴨氏の、そして三輪山型説話は大物主神を齋き祀る三輪氏の、それぞれ伝承する説話であつたろうと考えられる。とすれば阿治志貴高日子根神の登場する歌謡は、この神を尊崇する葛城の鴨氏の伝承する説話に関係すると考えられる。これ等の氏族は、それぞれに己が祖神の神婚説話を持っていたのである。

葛城の鴨氏は、三輪氏更には山城の鴨氏と同族であつた。神代紀一書には

大國主神、亦名大物主神、亦号三國作大己貴命。

とあり、この大己貴神の幸魂奇魂が「日本國之三諸山」に住んだのが「大三輪之神」であるとしている。ここに大國主神＝大物主神＝大三輪神の等式が成立する。神代紀一書には続けて

此神之子、即甘茂君等・大三輪君等

とあり、新撰姓氏録大和國神別地祇賀茂朝臣の条にも

大王朝臣同祖。大國主神之後也。大田田禰古命孫大賀茂都美命  
一名大賀茂足奉レ齋レ賀茂神社一也。

とあつて、大和の鴨氏と三輪氏は大三輪の神即ち大國主神の子孫で

あつて、出雲族の一派であることが知られる。しかも大三輪の神の子（孫）大田田禰古命の孫は、賀茂の名を称し、葛城の鴨氏の尊崇する賀茂神社を祀っているのである。この賀茂神社は大三輪神三社鎮座次第に

大田田根子命の孫大賀茂祇命勅を承けて社を葛城邑賀茂の地に立てて事代主命を奉齋す。仍りて賀茂君の氏を賜ふ。

とあることから、鴨都波八重事代主命神社であることが知られる。一方、山城の鴨氏は新撰姓氏録山城國神別天神の条によると賀茂県主。神魂命孫武津之身命之後也。

鴨県主。賀茂県主同祖。神日本磐余彦天皇。諡神武。欲レ向ニ中洲一之時。山中嶮絶。跋涉失レ路。於レ是。神魂命孫鴨建津之見命。化レ如ニ大鳥一。翔飛奉レ導。遂達ニ中洲一。

と記されている。「神魂命」という神名の表記のしかたは、出雲國風土記と出雲國造神賀詞にのみ見られる。太田亮氏が「神皇産靈神」といふ神は、出雲神の中心となられた大國主命が崇敬せられ、その助を受けたと伝ふるが如く、出雲神系統氏々の氏神であつたのではなからうか」と言われ、また戸谷高明氏が「タカミムスビの神は高天原系神話に現われて主流的な位置を占め、これに対してカミムスビの神は傍流的な出雲系神話にしか現われていないこと」を指摘されたように、カミムスビの神は出雲系の祖神である。従つて山城の

鴨氏も、葛城の鴨氏や三輪氏と同じく出雲族の一派であることが知られる。しかも山城鴨氏の祖神たる賀茂建角身命の事蹟は

日向曾之高千穗峯天降坐神、賀茂建角身命也、神倭石余比古之御前立坐而、宿坐大倭葛木山之峯。自<sub>レ</sub>彼漸遷、至<sub>二</sub>給山代国岡田之賀茂。随<sub>二</sub>山代河<sub>一</sub>下坐、葛野河与<sub>二</sub>賀茂河<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>会至坐。見<sub>二</sub>迤賀茂川<sub>一</sub>而言、雖<sub>二</sub>狭小<sub>一</sub>、然石川清川在。仍名号<sub>二</sub>石川瀬見小川<sub>一</sub>。自<sub>二</sub>彼川<sub>一</sub>上坐、定<sub>二</sub>坐久我国之北山基<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>爾時<sub>一</sub>、名曰<sub>二</sub>賀茂<sub>一</sub>也。

(山城国風土記逸文)

と語られていて、賀茂建角身命は大和の葛木山から岡田の賀茂<sup>⑤</sup>を経て山城へ遷ったことになっており、これからすれば山城の鴨氏は葛城の鴨氏の一派と考えられる。ただ賀茂建角身命は天降神と伝えられる神魂命の孫であり、新撰姓氏録でも賀茂県主、鴨県主は天神に列せられているのに対して、大国主神は国つ神であり、賀茂朝臣は地祇に列せられている。この点は太田亮氏の説かれる如く、建角身命も元来は地祇の族で葛城の鴨氏の一派であったのが、後世賀茂神社が盛大になるに及んで葛城の鴨社との関係を絶ち、天神の族と云うに及んだと考えられる。以上述べ来たように、山城の鴨氏と大和の三輪氏は、阿治志貴高日子根神を祭る葛城の鴨氏を中にして同じ血統に連なっており、いずれも出雲族の一派と見ることができるのである。

阿治志貴高日子根神の神婚説話

これ等の氏族が伝承する神婚説話のうち、丹塗矢型説話の賀茂神社縁起譚は山城の鴨氏が、三輪山型の説話は三輪氏が、それぞれ伝承するものであることは先に述べた。ところで事代主神が八尋熊罴となつて三嶋溝咋の媛を訪れたという話は、摂津三嶋の鴨氏によって伝承されていたと考えられる。淀川という大河のほとりは、まさに八尋熊罴となつた神の訪婚を語るにふさわしい地であつた。三嶋地方には神名式嶋下郡に溝咋神社、三嶋鴨神社があり、ここにも鴨氏が勢威をはつていたものと思われる。この三嶋の鴨氏は新撰姓氏録摂津国神別地祇の条に

鴨部祝。賀茂朝臣同祖。大国主神之後也。

とあるように、葛城の鴨氏と同族関係にあり(ひいては三輪氏、山城の鴨氏と同じ血縁につながる)、事代主神がこの地の女に通つたということは、葛城と三嶋の両鴨氏の姻戚関係を反映しているものと思われる。ところが古事記では同じ話を記述して、神を事代主神の父大物主神とし、神が化したのは丹塗矢であるとしている。神を大物主神としたのは、単に親子をとりちがえたという以上に、三嶋鴨氏においては、大和の大氏族である三輪氏との結びつきを説話によって証したいという要求があり、三輪氏においては後に神武天皇の太后となつた伊須氣余理比売を大物主神の子とすることによって、己が一族と大和朝廷との関係を強調したいという要求があつたもの

と思われる。両氏族の要求が合致したことによって説話は変改され、その際三輪山型から丹塗矢型に移行した。それには三嶋鴨氏が山城鴨氏と関係を有していたということの他に、三嶋地方が山城国と境を接し、このあたりが丹塗矢型と三輪山型の説話の近畿における分布の接点になっていたからではないか。もともと三輪氏が伝承する大物主神の神婚説話では神は蛇神であり、神が通う相手の女は河内美努村（古事記）もしくは茅渟県陶邑（書紀）の陶津耳命の女であった。それが古事記の伊須気余理比売の出自説話で右のような変改を受けたため、新撰姓氏録大神朝臣条の神婚説話でも話の筋は三輪山型をとりながら、相手の女を「三島溝杭耳之女」としているのである。しかしここでは神の衣につけた苧が茅渟県陶邑を経て三輪山へ向っていることを記して、三輪氏本来の伝承の痕跡をとどめている。

次に播磨国風土記託賀郡荒田の条の話の伝承氏族を考えてみる時、秋本吉郎氏は国造時代以前播磨国東北部は播磨鴨国といい鴨氏が占居していたと述べられ、更に奥津嶋比売命の話は鴨氏族の伝承であろうとしておられる。同様に考えて、同じ託賀郡に伝えられるこの天目一命の神婚説話も、播磨を本拠としていた鴨氏の伝承するところと考えてよいであろう。

いずれにしても、丹塗矢型と三輪山型の神婚説話の間に、テ-

マ、訪婚する神、相手の女について共通点が見られ、或いは交替現象が生じるのは、これらの説話を伝承する山城・葛城・三嶋・播磨の鴨氏更には大和の三輪氏が同族であったことに起因すると見てよいであろう。

### 三、蛇神と雷神

阿治志貴高日子根神は蛇神である。「天なるや……」の歌謡の「み谷二渡らす」の表象は、折口信夫氏が「三谷を一わたし、更にあちらから此方へ今一わたしするだけの畏るべき長大な御身を持たせられる」と解され、松村武雄氏が八岐大蛇に関する「其長度谿八谷峽八尾」（古事記）「蔓延於八丘八谷之間」（書記正文）等の記述をひかれて、『み谷二互らす』という類ひの発想法は、その主体が長大な長蟲の靈物であることを説示する一つの慣用であった」と言われるように、蛇の姿態を表現したものである。しかしまた、この神に見られる、喪屋を切りふせて美濃国まで蹴放ったり、「甚屋夜哭坐」（出雲国風土記神門郡高岸郷）などの行動には、雷神としての性格も看取することができる。

一方、この歌謡と親近の関係にある丹塗矢型説話における父神は、子が別雷神であること、丹塗矢が火雷神であることより、雷神であることは明らかである。この型の説話では丹塗矢が重要な役割

を果たしているが、神婚説話における矢の意義について柳田国男氏は、「箭は固より神の斎串の最も神速なるもの」であり、「神木の分身」であって占有権を象徴するものであるとしておられる。そして加賀神崎の説話について、そこに登場する弓箭の意義を「恐らく是も均しく神の靈を姫神に依らしむる美しき箭の一例で、後世の人身御供の物語に必ず伴ふ白羽箭と同じく神が処女を点定したまふ一つの形式であつたのであらう」と言われていることは、そのまま鴨系の説話における丹塗矢にあてはまるであらう。ここに矢が丹塗りであつたのは、処女を点定する神が雷神であつたからに他ならない。丹塗矢は雷の形状をしめし、雷神の象徴であつたからである。

更に言うならば、雷神は天上から地上への火の運搬者であつた。柳田氏は「日本には火山は多いが、我民族の火の始は之に発したのでは無かつたらしい。天の大神の御子が別雷であつて、後再び空に還り給ふと云ふ山城の賀茂、又は播磨の目一箇の神の神話は、此国のプロメトイスが霹靂神であつたことを示して居る」と言われ、更に「本来鍛冶は火の効用を人類の間に顯すべき最重要の工芸であつた。同時に又水の徳を仰ぐべき職業でもあつた。日本では火の起源を天つ日と想像し雷を其運搬者と見たが故に、乃ち別雷神の神話は存するのである」と言われている。美和の大物主神が丹塗矢となつて勢夜陀・多良比売を娶り、なした子の名が比売・多良伊須余理比

売（書紀では姫踏・鞆五十鈴媛命）と鍛冶に縁の深いタタラの語を含んでいるのも、また播磨国風土記託賀郡の説話に登場する父神が天目一命という鍛冶者の奉ずる神であるのも、由なしとしないのである。

他方、三輪山型説話の神は蛇神であつた。崇神紀十年九月の倭迹々日百襲姫命の箸臺説話では、大物主神は「美麗小蛇」の正体であらわし、遂には「踐ニ大虚、登ニ御諸山」てしまふ。しかるに古事記の伊須氣余理比売の出自に関する説話では、「美和之大物主神」は丹塗矢に化して女のもとを訪れている。ここでは説話の型の移行が考えられるが、それにしても蛇神は雷神に変身しうる性格を持つていたのである。

このような例は他にも見ることが出来る。常陸国風土記那賀郡茨城里の条に伝える晡時臥山伝説では、素姓の知れない男と夫婦になつた女が小さな蛇を産むが、その子は不思議な性格の持主であるところから神の子と知れ、父神のもとへ行くことになる。そしてその子は旅立つに当たつて従者が欲しいと言うがことわられ、恨みを含んで「臨決別時ニ不勝ニ怒怨ニ靈ニ殺伯父ニ而昇レ天」ろうとするのである。三輪山型説話に類する話であるが、ここでも神の子は蛇神にして雷神の性格をあらわす。また日本霊異記上巻第三話の道場法師は、雷神の寄胎するところであつたが、「頭纏レ蛇ニ遍、首尾垂後而

生」れたのであった。更に蛇神即雷神の性格を顕著に示すのは、雄略紀七年七月条の少子部連螺麻の話である。

天皇詔ニ少子部連螺麻曰、朕欲見三諸岳神之形、或云此山之神為ニ大物代主神一也或云菟田墨坂神也汝誓力過人、自行捉来。螺麻答曰、試往捉之。乃登三諸岳、捉ニ取大蛇、奉レ示ニ天皇。々々不ニ齋戒。其雷風々々、目精赫々。天皇畏、蔽レ目不見、却ニ入殿中。使レ放ニ於岳。仍改賜レ名為レ雷。

この話は日本靈異記上巻第一話では、雷神のこととして語られている。右に見る限り、蛇神即雷神とする信仰が存したことは、否定できないであろう。

阿治志貴高日子根神は記紀においては蛇神及び雷神の性格をあらわすが、出雲国風土記では専ら水の信仰に關係して語られる。即ち仁多郡三沢郷の条では、この神の禊ぎを學んで出雲国造が禊ぎをすることを記しており、楯縫郡神名桶山の条には、この神の御子多伎都比古命（タキツは滝津であろう）に雨乞いをするに必ず雨を降らせることある。古代蛇神は水の神であり、雷も雨を伴うものであるが故に、水と蛇と雷は非常に深い關係にあった。阿治志貴高日子根神は水を掌る神であったと考えられる。

またアズスキタカヒコネという神名の中心は言うまでもなくスキにあり、スキは鋤と考えられる。武田祐吉氏の御指摘の如く、この

神名は、出雲国風土記意宇郡出雲神戸の条に「五百津鉏々猶所ニ取々ニ而所造天下ニ大穴持命」といわれた大國主神の御子神としての性格をよくあらわしているといえよう。この神が農具としてのスキを祀ったものであろうことは、肥後和男氏も既に説かれるところである<sup>④</sup>。水を掌る神であり、しかも農具であるスキを神名の中心にしていることからして、阿治志貴高日子根神は農業神としての性格が非常に強いことができる。

松村武雄氏は出雲系神話の特徴として、水・雨に關する靈格の豊多、農業關係の神々の豊多、蛇性的靈格の豊多などを挙げ、その成因を出雲系民族が「國つ神」族のうちでも最も強く大地に即した生活、農耕食養經濟を最も組織的に早く営為したことに求めておられる<sup>⑤</sup>。阿治志貴高日子根神の歌謡を、そして丹塗矢型及び三輪山型の説話を伝承した氏族は、出雲族の一派であった。これらの説話に主役を演じる神が蛇神であり或いは雷神であるのは、説話を伝承する氏族の生活と信仰を反映したものと云えるであろう。

#### 四、棚機つ女

「天なるや……」の歌謡においては、阿治志貴高日子根神の御名がうたわれ、その蛇体が「み谷ニ渡らす」と表現されている。正体不明の男であったこの神の名と蛇神としての正体が明かされたの

である。神の素姓、正体が問題とされるのは、先述のようにこの歌謡が神婚説話の中でうたわれたからであろう。従つてこの歌謡の示す状況は、何物かに姿を変えて女のもとに通つた阿治志貴高日子根神が女に正体を知られ、蛇神本来の姿を現じて飛び去らうとする——そんな場面であらうと想像される。

ただ疑問として残るのは、「天なるや弟棚機のうながせる玉の御統穴玉はや」の歌詞が単に「み谷二渡らす」という蛇の姿態の形容であり、下句を引出すための修辭にすぎなかったのか、という点である。「弟棚機のうながせる玉の御統」は、それにしては余りにも具体的であり、蛇の姿態の形容としては唐突の感を免れない。佐竹昭広氏は、蛇響入の昔話には女が糸を紡いだり機を織つたりする場面が冒頭に語られる例が散見すること、三輪山伝説では芋環の糸が相手を探知する手段として用いられ、話の展開に中心的役割を果たすことから、この伝説は神衣を調えるための機織りを仕事としていた巫女達が生み出したものであらう、と説いておられる。<sup>④</sup>

機を織るということは、女達の重要な宗教上の任務であつた。柳田国男氏によれば、<sup>⑤</sup>「兎に角に機を織ることが上手といふのは、元は確かに神を祭るに適したといふことも意味していた」し、「織姫といへば神に仕ふる少女であり、後には祀られて従神の一に列すべき巫女であつた。」弟棚機もそのような神に仕えて神衣を織る巫女

の一人ではなかつたらうか。このことはまた、この歌謡と親近関係にある丹塗矢型及び三輪山型の説話に共通して登場し、神の妻となる女の名が「玉依比売」もしくは「玉櫛姫」であることによつて証しうる。

柳田氏によれば、<sup>⑥</sup>玉依比売とは即ち魂遷り姫で、「神に奉仕する巫女戸童が超人間の言語を為すだけでも斯く名づくることを得たのに、昔は其上に具体化したる靈の力が示されて、其果実の出現を以て愈々其依坐の人に遠く、神に近きことを證據立てたのである。明玉の児孫を生ずると云ふことは、神の分靈の空名で無いことを表示する一の象徴であつたかと思ふ。之を他の一面から説明すれば、此の如き靈石を管理し得る者は託宣を職とする巫女に限り、彼等は其祖先即ち上代の巫女をば、神に接近して神の王子を産む程迄に、神異なる婦人なりと主張し得たのである。」玉櫛姫なる名称もまた、「神の斎串の最も神速なるもの」である矢によつて神が点定した巫女を示すのである。

ここに一つの物語が浮び上ってくる。阿治志貴高日子根神実は蛇神は、姿を変え素姓を隠して、神衣を調えるための機織り女即ち弟棚機のもとを訪れた。自分の夫は一体誰なのか、夜毎訪れる正体不明の男を迎えて女の不安と疑惑は募るばかりである。遂に一計を案じて女は夫の正体を知った。女が策した計が如何なるものかは知る

由もないが、女が棚機つ女であることからすれば、やはり三輪山型説話におけるが如く宇環の糸を用いたと考えるべきであろう。正体を知られた神は、女を訪れて女の目の前でその本性をあらわし、蛇の姿となって天上へ昇っていった。「天なるや……」の歌謡は、蛇神昇天の際、女がうたった歌ではあるまいか。

右のような物語と歌謡を生み出し語り伝えたのは、葛城の高鴨の神に任えて神衣を織る巫女達であつたらう。機織りの巫女達は、自分達が齋祀する阿治志貴高日子根神と自分達の祖先である上代の巫女との婚姻の話を作り上げた。「天なるや弟棚機」には、物語の女主人公の、そして物語を生み出し伝承した女達の生業がうたいこまれているのである。

しかし「天なるや弟棚機」とは天上界の棚機つ女であつて、人間界の女とは身分を異にする。女が阿治志貴高日子根神の蛇体の形容に地上の女ならぬ天上の棚機つ女をうたったのは、この神が正体をあらわして天上へ昇っていくからである。女の目前にあるのは既に正体不明の男ではなく、畏怖すべき神である以上、その神の天上へ飛び去ってゆく姿の形容には、地上の景物ではなく天上の景物をもつてするのがふさわしいと考えられたのであろう。天上界に想像される棚機つ女のこと、天岩戸の神話に登場する天照大御神や天の服織女に見られる通りである。

阿治志貴高日子根神は天上界の神ではない。しかしこの神は、前述のように蛇神としての性格と雷神としての性格を合わせ持っている。そして雷神は、前に引いた柳田氏の論にもあるように、天上から地上への火の運搬者である故に天上と地上を往復するものと考えられる。従つて阿治志貴高日子根神が天上へ昇つてゆくのも、女がその天上にあつて自分と同じく神衣を織ると伝えられる棚機つ女を景物として歌うのも、不思議ではない。

もともと鴨氏の伝承は天上界との関係が深く、この点すぐれて地上的である三輪氏の伝承とは対照的な特徴を示す。賀茂神社縁起譚では、火雷神の子である別雷神は、自分の父は天上に在りとして天上へ昇つてゆく。また播磨国風土記託賀郡の神婚説話でも、父は天目一命とされている。ここでは子の昇天は語られていないが、父神は名に「天」の字を負っていることからして、天上に関係の深い神と考へてよいであらう。天目一命が鍛冶者の奉ずる神であつたことは先に述べたが、鍛冶と火と雷の深い関係からみて、この神も雷神と考へられる。

「天なるや」の表象は、葛城鴨氏の祖神たる阿治志貴高日子根神の雷神としての性格と、ひいては鴨氏の伝承に特有の天上界とのかわり方を表わしたのと言えよう。しかし再び言うならば、この歌謡にうたい出されたのが天上の他の女神ではなく、天の棚機つ女

であるところに、この神婚説話と歌謡を作り上げた鴨氏の巫女の生業が投影していると見るべきであろう。

ところでこの歌謡は後に物語と切り離され、神婚説話の背景を失なうて、専ら神名を顕わすためにのみ——即ち神託の如きものとして——高鴨の神人集団の中で伝承されていったのではなからうか。天若日子の神話に結びつけられる前の段階において、既にこの歌謡は物語的背景を失なっていたと見るべきであろう。

## 五、阿治志貴高日子根神と出雲

阿治志貴高日子根神は、出雲国風土記では意字郡賀茂神戸・神門郡塩治郷・同高岸郷・仁多郡三沢郷の四カ所に事蹟が語られ、楯縫郡神名樋山ではその御子の事蹟が語られている。中でも賀茂神戸の条では

所<sub>レ</sub>造<sub>三</sub>天下<sub>一</sub>大神命之御子、阿遲須積高日子命、坐<sub>三</sub>葛城賀茂社<sub>一</sub>。

此神之神戸。故云<sub>レ</sub>鴨<sub>神龜三年改<sub>二</sub>字賀茂<sub>一</sub></sub>。即有<sub>三</sub>正倉<sub>一</sub>。

と賀茂神戸が葛城の高鴨社の神領であることを述べている。また正倉院文書の出雲国計会帳には

天平六年

十一月

一 十四日進上賀茂神稅交易絲壹佰斤事

阿治志貴高日子根神の神婚説話

一 同日進上鹿皮肆拾張事

と出雲と葛城の高鴨社との関係を示す史料がある。

阿治志貴高日子根神は大国主神の子であり、出雲国風土記仁多郡三沢郷・神門郡高岸郷にその養育のさまが記されているように、出雲国で育った神である。それが大和国葛城の高鴨の神となったのは、成人して後出雲から大和葛城への移住が考えられたのではないか。即ち出雲族の一派が大和地方へ進出して鴨氏となり、その本拠地である葛城で祭ったのが、故郷出雲の神である阿治志貴高日子根神であった。そして故郷の地出雲に神領を置いたのである。阿治志貴高日子根神が右のような氏族の歴史を背景に持つ神である以上、農業神としての水神・蛇神を崇拜する出雲族の信仰を反映して、水神的靈格をもつ蛇神・雷神として語られるのは当然のことであつた。しかも「天なるや……」の歌謡にまつわる伝承は、もっとも代表的な出雲神話である八岐大蛇退治譚とも相通ずる性格を有するのである。

松村武雄氏は八岐大蛇の神話は本然的には「招き齋き型」であつて、「退治型」ではなかつたと言われる。即ち「水の靈・地の靈として、作物に関与した靈格を——水の善い作用力を欲し、水の悪しき作用を欲しないことから——巫人が御饗して招き齋いてゐたのが、原初的意義であつた。」大蛇の犠牲とされる八処女の原義は、

年毎の神祭りに一人ずつ神の臨時の妻として一夜妻の役を演じた巫女であり、大蛇に飲ませる酒は神を招ぎ迎える饗宴の料、酒船を置いたサズキは神を招ぎ迎える巫女の占める聖座である、と考えられるわけである。ここに八岐大蛇と奇稲田姫との関係は、阿治志貴高日子根神と棚機つ女との関係に対応するのではないか。大蛇と阿治志貴高日子根神は、いずれも水の靈たる蛇神であり、農作物の豊饒に深い関係をもっていた。その妻となった奇稲田姫も棚機つ女も、巫女である。

要するに、阿治志貴高日子根神の神婚説話も丹塗矢型及び三輪山型の説話も、本原的には水の神と神に仕える巫女との交婚によって農作物の豊饒を祈るという信仰をあらわしたものであり、その信仰は八岐大蛇退治の神話の原初形態にも存した。倉野憲司氏は、大蛇退治の話の一步手前には賀茂系の神話があつて、その素材となつたとされているが、そのような直接の親子関係ではなくて、三輪山型説話や阿治志貴高日子根神の神婚説話を含むこれら一連の説話の共通の祖として、出雲族の生活と信仰を考えた方がよいであらう。

出雲は「河之両辺或土地豊沃五穀桑麻稔頗<sup>②</sup>枝 百姓之膏腴<sup>③</sup>也」とされているように、斐伊川によって恵みを受け沃土を供給されたが、一方この川は洪水の害が甚だしく、民衆は常に川の動向によって生活を左右された。また河川沼沢に棲む蛇類によつても害を被つ

たことであらう。このような地に住む民が水の神を特別に尊崇したのは、ごく自然であつた。その出雲族を祖先とする鴨氏あるいは三輪氏が、父祖の地を離れても先祖伝来の信仰を持ち続ける一方、己が氏族の祖神を主人公として作り上げたのが、丹塗矢型及び三輪山型の神婚説話である。阿治志貴高日子根神の神婚説話と歌謡も、出雲の民であつた遠い日の記憶を持ち続ける葛城鴨氏の神人集団の中で、神に仕え神衣を織る女達が己が祭る神を主人公に、そして自分達の祖先である遠い昔の巫女を女主人公にして作りあげた物語であつたろうと思ふのである。

(注)

- 1、後出注8及び注9
- 2、『記紀歌謡集全講』
- 3、『日本古代史新研究』
- 4、ムスビ二神に関する考察(『古代文学の研究』所収)
- 5、和名抄に「相樂郡賀茂郷」  
神名式相樂郡に「岡田鴨神社」
- 6、『姓氏家系大辞典』
- 7、日本古典文学大系『風土記』播磨国託賀郡袁布山の条頭注
- 8、日本文学の根柢(『日本文学の発生序説』)
- 9、『日本神話の研究』第四卷、第二章 高天原系出雲系及び筑

紫系神話の特徴

- 10、玉依姫考（『妹の力』所収）
- 11、炭焼小五郎が事（『海南小記』所収）
- 12、目一つ五郎考（『一目小僧その他』所収）
- 13、『記紀歌謡集全講』
- 14、賀茂伝説考（『日本神話研究』所収）
- 15、『日本神話の研究』第四卷、第二章 高天原系出雲系及び筑紫系神話の特徴
- 16、蛇髯入の源流（『国語国文』 23巻9号）  
古代の言語における内部言語形式の問題（『古事記大成』第三巻所収）
- 17、瓜子織姫（『桃太郎の誕生』所収）
- 18、玉依姫考（『妹の力』所収）
- 19、前出注11及び注12
- 20、『寧楽遺文』上巻
- 21、『日本神話の研究』第三巻、第十一章 八岐大蛇退治の神話
- 22、賀茂系神話と三輪系神話との関聯（『古典と上代精神』所収）
- 23、『出雲国風土記』出雲郡の条